

宮城 光信*

Mitsunobu MIYAGI*

研究に何年間も携わり、何か新しい事を発見・発明しようと思いつきながら一つの事に集中していれば、必ずその成果を得ることができる。その成果が、そのときあるいはその後の学問、技術、社会に及ぼす影響が大きければ大きい程、その研究は優れたものと評価される。特に、発見、発明の種の質が良ければ、種を播いたということが高く評価される。即ち、多くの研究者・技術者がその成長に携わり、優れた実を結ばせ、その実がまた種となり、新しい分野が開拓されていくからである。このように、影響力の大きい分野で研究を展開して行くことは、研究者にとっては大きな魅力の一つである。しかしながら、このような分野での研究の真の牽引者はそれ程多いわけではなく、数少ない特別の選ばれた能力を持つ研究者のみであろう。そして大部分の研究者はその分野の研究の進展に多少は貢献はするものの、牽引される側に立ち、所詮は大きな研究の流れの中で埋没していく場合が少なくはない。時代の脚光を浴びている研究分野に身を置いていると、研究者自身も、自分自身が研究の最先端を走っているかのような錯覚に陥る場合もなきにしもあらずである。

研究の分野は多種多様であり、その研究が非常に大きな影響を及ぼすとは明らかに思われなくても、どうしても必要な分野がある。特に応用を指向した工学の分野ではその数は少なくはない。従事する研究者の数という観点から言えば、研究の本流でもないし、また華やかさも無い。研究の成果が広い分野で評価されるわけではないが、研究者の誰かが使命感と情熱を持って研究を遂行していかなければならないだろう。研究の理解者が多いわけではない故、研究の意味を問われる批判も一人で受けて立たなければならない。少人数あるいは単独での研究のために、成果は短期間であがるわけではない。長い間の孤独な戦いの中にいなければならないことは避けられない。しかしながら、最後には成果が孤独を救い、研究者に喜びを与える。多くの研究者の中でのbest oneではなく、only oneの研究である。best oneを達成できるのはその分野では唯一人であるが、only oneを達成できるのは、誰もが可能でその数も多数である。

only oneを標榜する研究者の容易に陥り易いのは、その独善性である。重箱の隅の研究である。謙虚さを十分持ち、人々の批判を喜んで受け、真の目標・目的に向かって常に研究の軌道修正をする柔軟さを身につけることが必要である。

研究テーマの設定・選択は研究者の能力・資質のみではなく、最終的な成果によって得られるであろう評価にも影響される。評価の大小をどのように受け入れるかは、研究者の人生観に依存する。我々の前には、誰かが遂行しなければならないテーマが多数散在している。

* 東北大学大学院工学研究科（〒980-77 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉）

* Graduate School of Engineering, Tohoku University, Aramaki-Aza Aoba, Aoba-ku, Sendai Miyagi 980-77